

市民創作劇

「花のき村と盗人たち」



みんなで呼吸を合わせて



真剣な顔、顔、顔



(衣装づくり)



(小道具づくり)

劇への思いを込めて

今年も市民創作劇が催されます。昨年に引き続き参加している人や新たに集まった出演者・制作スタッフの総勢137人による手作り創作劇。開演間近、皆さんの奮闘は最後まで続きます。

花のき村はどこの村なの？

市民創作劇「花のき村と盗人たち」の原作は、童話作家の新美南吉の作品です。この作品が書かれた昭和17年当時、南吉は、安城高等女学校の教師として勤め、この安城の地（現新田町）に下宿していました。

この「花のき村」の舞台がどこかははっきりしませんが、市内の「花ノ木」という地名からヒントを得たともいわれます。「花ノ木と橋の由来」には、「1789年（天明8年）安城ヶ原（中略）に『花ノ木田』という名の小さな田が開かれた。そこはハナノキの自生地、春は濃紅色の花、秋は紅葉の美しいところでした。（中略）1891年（明治24年）に安城駅が開設されると、一本の野道の両側に家が建ち、商店が軒を並べ街が作られ『花ノ木通り』と呼ばれ人情豊かな町となりました」とあります。そうした風情と人情あるまちを歩き、過ごした南吉。安城のまちの善良な人々との触れ合いに思いを馳せながら、この作品を書いたのではないのでしょうか。

信じることの温かさを 感じてください

昨年に続き、市民創作劇の演出を担当夏目慈さんにお話を伺いました。

短い原作ですが、大勢集まった参加者の皆さんに出演してもらい、2時間ほどの芝居にします。「花のき村」というユートピアに、盗人が入り込み、人の温かさに触れ改心するというのが原作です。このイメージから外れずに、そして所々に「遊び」も織り込みながら芝居を作っています。現代は「不信の時代」といわれ、子どもも大人も「信じてほしい」という気持ちを心に抱いています。この芝居を通して、信じること、信じてもらうことの大切さ、温かさを感じ取ってもらえればと思います。

新たに参加した人、昨年参加してハマツた人、芝居好きの人がたくさんいます。一つの舞台を通して人と人とのつながりが深まり、充実感を味わえればと思います。

問い合わせ

市民会館（☎75-1151）

あらすじ

むかし、むかし「花のき村」という静かで平和な村に5人の盗人がやってきました。盗人になりたての4人の弟子たちは、失敗ばかり…。そこへ面白いワラジをいた不思議な小坊主が、盗人のかしらに子牛を預けて去ってしまいました。何もしないのに一頭の牛が手に入って笑いがとまらない。はすのかしらの目がらは、とめどまなく涙がこぼれていました。はたして、そのわけは…



演出家の指示も入念に



けいこは続く